

男にとって化粧はどのような意味を持つのか

——ある男性の語りと実践を通じた基礎的考察

小口 藍子*

現代日本で男性の化粧実践(本稿ではメイクアップを指す)は稀有な出来事ではなく、拡大と定着の気配を見せている。既存の男性/男性性研究の枠組みは、男性や男性性を論じる際に構造やイデオロギーを早急に措定し、一人ひとりが男性として生きようとする実践を十分に捉えてこなかった。本稿は一人の化粧する男性に実施したインタビューと参与観察から、彼にとっての化粧実践の意味を明らかにし、男性として生きようとする実践の様相を探る。彼はジェンダー問題に関心を寄せながら化粧を始めたことで、それまで馴染んでいた男性同士の集団に居心地悪さを覚えるようになった。しかし同時に彼は男性の友人たちに化粧を施したり、同じく化粧する他の男性と交流したりしながら、化粧を通して男性たちとの新しいつながり方を模索する機会にも開かれる。彼にとって化粧実践は、これまでと異なる形で他の男性たちとつながり直す機会を彼にもたらすものである。

キーワード：現代日本、男性、化粧、インタビュー、つながり

1. はじめに

ジェンダー研究分野のひとつである男性/男性性研究(men and masculinity studies)は、男性や男性性についての人々の認識がいかに社会的に構築されているかを明らかにしてきた。しかしながら既存の男性性理論の枠組みは、男性や男性性について検討する際、具体的な実践や出来事に先んじてイデオロギーや構造を足早に想定してしまうという問題を抱えてきた(小口 2024)。これを克服するためには、一人ひとりが男性としてどのように生きているのかを、当事者の生に深く根差しながら明らかにする研究が必要である。

これを行うにあたって本稿が着目するのは、現代日本の男性の化粧実践(本稿ではファンデーションや口紅等を使って顔に彩色を施す、メイクアップの行為を指す)である。現代日本の男性の化粧実践は、その歴史社会的文脈ゆえに、男性ジェンダーの個別具体的な生を検討するうえで有効な題材である。

近代化から総力戦までの日本では、男性は兵士や労働者としての役割を果たすため、化粧を含む華美な装飾行為から遠ざかる傾向があった。しかし戦後になると、男性も着飾る行為に開かれる。男性化粧も1980年代頃から徐々に顕在化するが、近年までは安定した市場が形成されるほどではなかった。

しかし2010年代終わり頃から男性用メイクアップ製品の市場は大きな伸びを見せ(株式会社インテージ 2023)、男性の化粧実践は今や拡大と定着の気配を見せている。これは近代化以降「男は化粧しない」という通念が根強かったなかで、化粧と男性ジェンダーとの意味づけが変容しつつあることを意味するだろう。ゆえに男性の化粧実践には、男性として生きることをめぐる豊かな実践や語りがあることが予想される。

現代日本の男性化粧の研究では、製品開発にかかわる技術的な分析(竹原・奥野・柴入 2021)も着手されるが、大きな関心を集めるのは、男性化粧

* お茶の水女子大学大学院

が既存のジェンダー関係にもたらす影響である。現代日本で外見を気にかける男性たちやそれを受容する女性たちを「男性中心的／ヘゲモニックな経済の攪乱にも再生産にもなり得る」とする飯田由美子 (Iida Yumiko) (2005: 71) の考察は、男性化粧をめぐる学術的な関心を端的に表す。

この問題関心にこたえる先行研究の見解からは、男性化粧が現行のジェンダー関係を大きく攪乱するというより、それを維持し得る形で普及する様子が読み取れる。ローラ・ミラー (Laura Miller) (2006) のメディア分析や平松隆円 (2009) の統計調査からは、男性の化粧実践が既存の男性性の様態と矛盾しない形で展開されることが指摘される。西岡敦子 (2013) はオンライン言説の分析を通して、ジェンダー規範から男性化粧を否定する意見も見られるものの、男性化粧を受け入れる土壌が形成されつつあると結論づける。しかし近年の実験調査では、男女平等意識の高さが必ずしも男性化粧の受容に繋がるとはいえない側面が指摘される (川野・徳迫・沢辺・日比野 2021)。山本梨華子 (2018) は化粧する男性3名に単発的なインタビュー調査を行い、彼らが化粧という装飾行為に開かれつつも、「男らしさ」の通念から装飾的な化粧を躊躇っていることを明らかにした。

しかしながらこれらの知見は、一人ひとりの男性の個別具体的な化粧実践や、それを取り巻く生の状況に深く根差して導き出されたわけではないことには注意が必要である。当事者のミクロな生活世界を検討することなしに男性化粧とジェンダー関係の結論を急げば、出来事に先立って構造を措定するこれまでの男性性理論 (小口 2024) と

同じ轍を踏むだろう。そこで本稿は、化粧する男性として生きる一人のひとの語りと実践から、彼にとっての化粧実践がどのような意味を持つのか明らかにすることを目的とし、男性として生きようとする個別具体的な実践を検討する。

II. 研究方法

1. 調査の概要

本稿の分析対象は、化粧する男性として生きるリョウタさんに実施した計3回の半構造化インタビュー、および筆者がリョウタさんに別のインフォーマント・ワタルさんを引き合わせた懇親会での参与観察である¹ (表1)。なお表1には記していないが、補足的に、筆者がワタルさんに実施したインタビューのデータも一部引用している。

ここではリョウタさんと筆者との関係、それに伴う筆者の位置性についても確認したい。筆者は知人の紹介を経てリョウタさんと知り合った。調査実施にあたって筆者はリョウタさんに、自身がジェンダー研究を専攻し、男性の化粧実践をジェンダーの観点から分析したいと考えていることを開示している。III. 以降で論じるように、リョウタさんもジェンダー問題やフェミニズムに関心を持っている。つまりリョウタさんの語りは、筆者とジェンダー問題やフェミニズムへの関心を共有するなかで形成されている。

さらに本稿は「語り手とインタビューアとの相互行為」(桜井 2002: 28) を検討するのみならず、インタビューアである筆者を、語り手・リョウタさんの実践に関与するアクターとしても分析す

表1 分析対象

日時	実施内容	実施方法	記録方法
2022年11月30日	リョウタさんインタビュー	対面	ICレコーダー
2023年5月24日	リョウタさんインタビュー	オンライン	ICレコーダー
2024年3月13日	リョウタさん・ワタルさんの懇親会	対面	終了後、フィールドノートに記録
2024年3月22日	リョウタさんインタビュー	オンライン	ICレコーダー

る。先述のように筆者はリョウタさんに別のインフォーマントを引き合わせる積極的な関与をしており、そのことを本稿の分析対象にするためである。

2. リョウタさんについて

リョウタさんの語りと実践の分析に入る前に、彼のライフストーリーを概観する。

リョウタさんは1989年、5人きょうだいの長子として四国地方で生まれた。両親は共働きだったため、年の離れたきょうだいたちが小さかった頃は、おむつを替えたりお迎えに行ったりしていた。

リョウタさんは小学生のときにアメリカ同時多発テロ事件をテレビで見たことをきっかけに、戦争や外交に関心を持った。お笑いも好きで、中学校の学園祭では仲のいい男性の友人たちと集団コントを披露した。高校時代もクラスで気の合う男性の友人たちとにぎやかに過ごしていた。

高校卒業後は地元を離れ、関東地方の大学に進学した。キャンパス内の男子寮に住み、仲良くなった寮のメンバーたちと多くの時間を共に過ごした。国際関係への関心のもと、中南米への留学も経験した。その後は都内の大学院を修了したのち、現在は非営利法人の職員として働いている。

リョウタさんは大学院に在籍していた2019年頃から、日常的に化粧するようになった。彼が化粧に興味を持ったきっかけには、当時のパートナーの女性との関係がかかわっている。

ある日リョウタさんは動画サイトで、夫が妻の化粧にまったく気づかないという内容の動画を見て、彼がパートナーの化粧に気づかなければ、パートナーが彼の前で化粧する意欲を失うのではないかと考えた。それからリョウタさんは化粧品に意識を向け始め、自身でもスキンケアや化粧を始めた。

彼はふだん化粧するとき、化粧下地、ファンデーション、コンシーラーで肌の色味を整え、ペンシルを使って眉と髭の薄い部分を描く。肌の色を補整すると唇の色が薄く感じられるため、時

折、赤みを足すリップバームも使う。ここから想像できるように、リョウタさんの化粧は一見してすぐにわかるというより、よく見るとわかるようなものである。実際に筆者が初めてリョウタさんに会ったとき、筆者は彼が化粧しているかすぐに判断できず、その後の会話を経て彼が化粧しているとわかった。

III. 調査結果 (1)

——化粧で「ホモソ」とつながり直す

1. 「ホモソ」で育ってきたということ

III. では2022年から2023年にかけて実施した2回のインタビューから、リョウタさんが化粧を通して経験したことを明らかにしていく。1回目のインタビューで彼が繰り返し語ったのは、男性同士の関係性についての悩みであった。

インタビューの序盤では、リョウタさんがジェンダー問題やフェミニズムを知り、同時期に化粧を始めたことで、パートナーや友人の女性たちとのトラブルが減り、「すごい話しやすくなった」ことが語られた。それと対比されるのが、男性の友人たちとの関係である。

リョウタさんは男性の友人とほとんど化粧の話をしなない。さらに彼は、男性の友人と会うときには化粧を「敢えてして [行] かない」こともあるという。なぜなら男性の友人たちはリョウタさんの化粧にまったく言及しないいうえに、その場で彼らの「男が化粧するなんて」という意識が「可視化されたら嫌」だからだ。

そのため彼は化粧を始めてから、「男性規範バリバリ内面化してる男性コミュニティ」に「居づらくなって」と語る。II.2. のライフストーリーからも窺えるように、化粧を始める前のリョウタさんは男性規範を強く内面化した「ホモソサイエティ的なところ」に「ずっぱり」所属し、「すごい楽しいな」と違和感なく過ごしていたという。しかし今の彼は「ホモソサイエティ的なところ」に「男が化粧するなんて」という規範意識を感じ、居心地悪さを覚える。

以降、リョウタさんは男性同士の関係性について積極的に語り始める。「化粧するようになって変わったこと」という質問の答えのひとつにリョウタさんが挙げたのは、「男性同士のコミュニケーションの取り方」に対する価値観の変化であった。

リョウタさんによれば、「男性同士のコミュニケーション」では褒め合うことがなく、マウントや皮肉の応酬をし、「ボケて突っ込んで」「おもしろい話」をすることが優先されるという。マウントや皮肉、「ボケて突っ込んで」というやり取りは、いずれも互いの中で優劣関係をつくりあげる作用を持つといえる。

伊藤公雄(1993: 167)は男性たちの「〈男らしさ〉へのこだわり」を、他者に優越したいという「優越志向」、自分の意志を他者におしつけないという「権力志向」、できるだけ多くのモノを所有し、所有したものを自分のモノとして確保したいという「所有志向」の3つの志向性として説明する。男たちのこれらの志向性は、女との関係でより強力に作用するが、男同士においても作用する(伊藤1993: 168)。リョウタさんのいう「男性同士のコミュニケーション」は、このうち「優越志向」を行為遂行的につくりあげるものだといえよう。このようなコミュニケーションを楽しみながら「ホモソの中で育って」きたリョウタさんは、「ホモソ」の外でのコミュニケーションに困難を感じている。

リョウタ：僕、はやっぱりつい最近までは結構ホモソの中で育ってきて、そういうのが全然なくて、やっぱ女性の友達が増える反面、そういうコミュニケーションの取り方が、すごいぎこちない。なんかこう、相手を褒めて、こっちも褒めてもらってとか、うーん、お互いをケアし合うような言葉とか、なんていうか、心遣いとか、雰囲気とか……自分に全然備わってないなっていうのが、すごい葛藤、葛藤っていうか、悩みというか。

「ホモソの中で育ってき」という語りは、先に引用した「男性規範バリバリ内面化してる男性コミュニティ」である「ホモソサイエティ的なところ」に「ずっほり」入っていたという語りと重なる。リョウタさんは「ホモソサイエティ的なところ」を「ホモソ」という表現に移行させながら、「ホモソ」を、これまで育ってきた場所と位置付ける²。

リョウタさんの語りにおいて「ホモソ」のコミュニケーションは、女性たちのコミュニケーションと対照的に位置づけられる。ジェンダー問題への関心と共に化粧を始めたリョウタさんには女性の友達が増えたが、彼と女性たちとのコミュニケーションは「すごいぎこちない」。彼には「お互いをケアし合う」ような言葉や心遣い、雰囲気「全然備わっていない」からであり、彼はそのことに葛藤や悩みを抱えていると語る。

III.2.では、リョウタさんの化粧実践と「ホモソ」との具体的な関係を明らかにしていく。

2. 突き放しと愛着のはざま

インタビューでリョウタさんが「ホモソ」の例として語るのは、大学院時代に住んでいた寮の男性コミュニティだ。本来その寮では、会議のなかで寮の方針を話し合う決まりだった。しかし実際には、リョウタさんを含む執行部の男性たちが「ずっと朝まで煙草吸いながら話してる」なかで、寮の方針を全部決めていたという。

この状況に異議を申し立てたのは、寮に住む女性たちであった。リョウタさんは、寮で「妙に女性の意見が通ってなかったり」、女性が「ご飯用意したり」していることに女性たちが「文句」を言っているのを耳にした。その頃から彼は学内のジェンダーの勉強会にも出始めた。はじめは心理的な抵抗もあったが、徐々にジェンダー問題に関心を向けるようになったという。

それを経てリョウタさんは、寮執行部の男性たちの在り方を「なんかちょっと違ったな」と感じるようになった。リョウタさんはこのことを、寮の思い出を振り返りながら下記のように語る。

リョウタ：めちゃめちゃ男性コミュニティが仕切ってるみたいときは、ずっと煙草吸いながら、一箱二箱空けながら、朝まで議論(笑)みたいな。

*：アハハ(笑)。

リョウタ：それが、民主主義のあり方なんだみたいな(笑)。けどなんか、全然健康というか、自分の健康とかを敢えて気づかないとか、やっぱそういうのが皆ある、なんとなく内面化されてる。っていうのが、構造なんだなってわかると(中略)セルフケアが大事だと、お互いのケアとか、みたいなところにも目が行って、とかそういう感じですね。だからまあ、そこと[化粧やスキンケアを始めたことが]リンクしてるところはかなりある。

リョウタさんは、彼を含めた執行部の男性たちが「ずっと煙草吸いながら」朝まで議論し、それを「民主主義のあり方なんだ」と思っていたことを笑う。彼は笑うことで「ホモソ」を突き放し、以前の自分や男性コミュニティをおかしなものとして筆者に提示する。筆者も一緒にこれを笑い、彼の突き放しの語りは強化される。

彼は続けて「ホモソ」の男性たちが自分の健康に「敢えて気づかない」よう「内面化」していることを、「構造なんだな」と理解できたと言語。さらにケアの大切さに目が向くようになったことは、リョウタさんが化粧やスキンケアを始めたことと「リンクしてるところはかなりある」という。リョウタさんは「ホモソ」の規範を「構造」の問題とすることで「ホモソ」を突き放し、自らの化粧実践を肯定する。

同時にこの語りからは、リョウタさんの「ホモソ」への愛着も読み取ることができる。彼は「ホモソ」の「構造」を笑って突き放すものの、彼の笑いからは「ホモソ」へのある種のあたたかなまなざしまでも窺える。

リョウタさんの経験と現代日本でタトゥーを介したネットワークを形成する若者たちの研究(山越 2022)とを比較すると、彼の「ホモソ」への突

き放しと愛着との混ざり合いが、化粧の特性に支えられていることがわかる。山越の調査によれば、若者たちにとってタトゥーを入れることは、タトゥーを入れれば加入できるコミュニティとタトゥーに否定的なコミュニティの「どちらかのアイデンティティを選びとらなければならない状態」(山越 2022: 297)をもたらし。

現代日本で男性化粧は少数派であるものの、タトゥーほど社会的逸脱とはみなされない。さらに重要なのは、化粧は「敢えてして[行]かない」ことで隠すことができることだ。II.2.で述べたように、一見わからないようなりョウタさんの化粧であれば、一時的にやめて隠すのもより容易い。リョウタさんは化粧を隠すことによって、化粧に否定的と予想される「ホモソ」に、居づらさを感じながらも出入りし続けられている。だからこそリョウタさんは「ホモソ」をめぐる、突き放しと愛着のはざままで葛藤する。

このような葛藤や悩みを語りながらもリョウタさんは、この状況を打破するために、他ならぬ化粧実践が有効ではないかという語りを紡ぎ始める。そのきっかけになったのは、彼が男性の友人に化粧を施したという経験の語りである。

3. 「ドキドキ」する経験

III.1.やIII.2.で語られた「ホモソ」への葛藤について、筆者はリョウタさんに、周囲に同様の思いを抱える人がいるか尋ねた。彼はこれに「多分ないんじゃないかな」と答える。しかし直後に彼は「けど例えば」と言葉を繋ぎ、男性の友人に化粧を施した経験を語った。

あるときリョウタさんは彼を含む男性2人と、当時のパートナーを含む女性5人とで集まり、化粧やネイルを互いに施し合って遊んだ。そのなかで彼はその場にいたもう一人の男性にコンシーラーを施した。それは、男性の友人の顔に触れるという「肌の接触を伴う」経験であった。

彼はこの経験を、これまでの男性の友人との間では「全然なかった」ものだと振り返る。リョウタさんがこの経験を、彼の「ホモソ」への葛藤に何ら

かの形でアプローチし得るものとして筆者に提示していることが読み取れる。この語りを興味深いと感じた筆者は、リョウタさんにさらに詳しい感想を尋ねた。

リョウタ：あーすごいなんか、新鮮だったし、なんか……なんだろうな、ちょっとドキドキもしました(笑)けどね、やったことないっていうのもあって。けどすごい良かったな、とは思ったんですよ。(中略)[化粧を施したら]「ええ!?!」「こんな違うの!?!」みたいな(笑)。

*：アハハ(笑)。

リョウタ：めっちゃめっちゃ若くなったね、って皆で驚いて。だからすごい楽しかったっていう印象があって。

リョウタさんはこの経験を「新鮮」で「ちょっとドキドキ」するものでもあったと語る。さらにその場にいた女性たち「皆」の反応についても、臨場感あふれる語りで筆者に提示する。筆者も笑いを交えながらリョウタさんの語りに反応する。

この語りが両者に感情的な盛り上がりをもたらしたことには、日本では男性同士の身体接触が特に少ないという文化的背景があると考えられる。曹美庚(Cho Mikyung)(2016)は、日韓の大学生男女が家族や親しい友人と身体の中の部位をどれくらいの頻度で接触させているかを調査し、その結果と米国の結果(Jourard 1966)とを比較分析した。それによれば、日本の男子大学生が同性の友人から顔に触れられる頻度は、米国や韓国の男子大学生の結果より少なく、さらに日本女性の友人同士の結果と比べても少ない(曹 2016: 269)。

ただしリョウタさんと筆者は、男性同士の顔への接触行為の珍しさを単に面白がっているわけではない。リョウタさんと筆者は、この「新鮮」で「ドキドキ」する出来事に「ホモソ」を変え得るような可能性を感じ取り、感情的な盛り上がりを通してそれを共有している。

III.1.で述べたように、リョウタさんは「ホモ

ソ」で化粧習慣を隠しており、そこに居心地悪さを覚えている。だからこそ、男性の友人に化粧を施したエピソードは、「ホモソ」でのコミュニケーションとはどこか異なる「すごい楽しかった」ものとして語られる。このやり取りを踏まえ、インタビューの最後にリョウタさんは、週末に予定している男性の友人たちとの会合に化粧道具を持参して、化粧を勧めてみようと思うと語った。

後日筆者はリョウタさんから、その会合で男性の友人に化粧を施したという連絡を、その様子を映した写真付きで受け取った。2回目のインタビューでは、筆者はこの出来事の詳細を尋ねた。

4. 「ホモソ」に化粧を持ち込む

リョウタさんは、その日の友人たちのことを下記のように説明する。

リョウタ：僕の大学[学部生]のときの学生寮の友達で、あのときの友達は。まあ男子寮だったんで、結構ホモソ感、というのがまあまああるところではあって。

彼らとは学部生時代の男子寮の友人であり、そこは「ホモソ感」が「まあまあある」コミュニティであった。つまりこの友人たちは、リョウタさんが育ってきた「ホモソ」を構成する男性たちだといえる。リョウタさんにとってこの試みは、化粧実践で「ホモソ」の居心地悪さに初めて挑戦するものであった。

この日リョウタさんは化粧して行き、会の途中で「最近メイクとかやってるんだよね」と切り出したという。さらに彼は化粧するのとしなないとでは「全然違うから」と続け、うち一人にファンデーションとコンシーラーを施した。「リアクションどうなるかわかんなかった」という彼の不安に反し、友人たちは「うわ、全然違うじゃん」、「いいねいいね」と肯定的な反応を見せた。会合の後、使った化粧品の詳細を尋ねる連絡を受け取ったともいう。

ここでは、リョウタさんが化粧を通して「ホモ

ソ」にはたつきかけるにあたって、単に化粧して現れて化粧習慣を打ち明けるだけではなく、日々実際に使っている化粧品を「ホモソ」に持ち込み、「ホモソ」のメンバーに化粧を施したことに着目したい。

このことは、化粧が他者と比較的共有しやすい行為であるために可能になっている。たとえばタトゥーや美容整形を誰かに打ち明け、それが肯定的に受け止められたとしても、その場でその人に同じ身体加工を施すのは難しい。求められる技能や設備の問題に加え、半永久的な身体加工であるほど、施すかどうかをその場で決断しづらいだろう。しかし化粧の場合、化粧品さえ持ち込めば、巧拙はあれどその場で化粧を施すことができる。化粧はすぐに落とせるため、施される側の心理的な障壁も比較的低いだろう。

このような化粧の特性ゆえに、「ホモソ」の男性たちは、あたかも化粧していないかのように見えていたリョウタさんから前触れなく化粧習慣を打ち明けられ、さらにその場で化粧を施されるという経験に晒される。リョウタさんの一連の実践は彼ひとりのパフォーマンスではなく、「ホモソ」のメンバーの身体を巻き込みながら展開される。

「ホモソ」の男性たちはこの経験を「すごいいいリアクション」と共に受け入れ、リョウタさんもそれを「よかった」と語る。とはいえリョウタさんの「ホモソ」への葛藤は決して解消されたわけではない。

リョウタさんはその理由を、彼が一方向的に化粧したという構図にあると説明する。彼は自身が「そういう趣味の人(笑)、みたいな」状態だったと笑う。この語りからは、リョウタさんが「ホモソ」に化粧を持ち込んだことで、「ホモソ」の内部にいなながらもどこか外部者としてまなざされるようになったことが読み取れる。

III.では、ジェンダー問題に関心を持ちながら化粧を始めたことで「ホモソ」への居心地悪さを深めたりリョウタさんが、「ホモソ」で化粧を打ち明けたり友人に化粧を施したりして「ホモソ」とつながり直そうとし始めたことが明らかになった。

続くIV.では、リョウタさんが同じく化粧する男性として生きるワタルさんと接したときのことを題材に、リョウタさんの実践をさらに具体的に明らかにしていく。

IV. 調査結果 (2)

——化粧する男性とつながる

1. 化粧する男性たちをつなげる

2024年3月、筆者はリョウタさんと、筆者の別のインフォーマント・ワタルさんとを引き合わせる懇親会を開催した。ここではまずその経緯を、特に筆者の意図に着目して確認したい。懇親会でのリョウタさんの実践を分析する際には、この会を設定してリョウタさんをワタルさんにつなげた、筆者の意図を踏まえる必要があるためだ。

III.でのインタビューを終えた筆者は、リョウタさんがどのように他の男性とかかわっているのか、語りだけではなく具体的な実践からも検討したいと感じていた。化粧実践で「ホモソ」が抱える問題に挑戦しようとするリョウタさんの語りを、筆者は興味深く聞いた。しかし同時にそれが、ジェンダー研究を専攻する筆者を前にした“模範的”な語りだとも感じていた。リョウタさんの実践をより実証的に検討するため、二者間のインタビューだけでなく、他の男性もいる場でのリョウタさんを見たいと考えた。

そこでリョウタさんにワタルさんを引き合わせたのには、2つの理由がある。はじめにワタルさんがジェンダー問題にも関心を持ちながら化粧する男性として生きているためだ。ワタルさん(1995年生まれ、会社員)は2018年から化粧を始め、眉やベースメイクのみならず、アイシャドウや口紅等のポイントメイクも積極的に楽しんでいる。ワタルさんは化粧のジェンダー規範意識を解消したいという思いのもと、自身の化粧をSNSで発信したり男性化粧のイベントを開催したりしている。ジェンダー問題への関心を同じくする二人であれば、心理的安全性が担保されやすいだろうと筆者は考えた。

表2 懇親会の会話内容

通し番号	主な話し手	内容
a	W・*	来るまでに何をしていたか
b	W・R・*	自己紹介
c	W・R・*	Wと*が出会った経緯
d	W・R	化粧を始めたきっかけ
e	W・R	化粧について、他の人と話をするか
f	W・R・*	男性たちの化粧のきっかけ
g	W・R	Wの情報発信や交流活動について
h	W・R・*	男性としてアイメイクすることの難しさ
i	W・R	最近の化粧のモチベーション・悩み
j	W・R・*	男性アイドル・男性俳優の化粧について
k	W・R・*	Rに似合いそうなアイシャドウ
l	W・R	男性として化粧することに迷いはあったか
m	W・R・*	男性のジェンダー規範と化粧実践との関係
n	W・R	勤務先に化粧して行くか
o	R	店員に褒められて高価な化粧品を買った話
p	W・R	男性はなぜ化粧に抵抗があるのか
q	W・R	外出時、どこで・どのように化粧直しをするか
r	W・R・*	男性は化粧を褒め合うか
s	W・R・*	Rの面接

筆者のフィールドノートをもとに作成。Wはワタルさん、Rはリョウタさん、*は筆者を表す。

次にリョウタさんとの交流は、ワタルさんにとってもメリットがあるだろうと想定できたためである。ワタルさんは男性化粧で起業することを目指して、男性にヒアリングを行ったり、SNSやイベントで化粧する男性たちと交流したりしている。そのためリョウタさんと話すことは、ワタルさんにとっても有用である可能性が高いと判断した。

懇親会当日、リョウタさん、ワタルさん、筆者は約3時間の間、食事をしながら歓談した(表2)。IV.2.以降では、懇親会でのフィールドノート、および筆者が後日リョウタさんに行ったインタビューを中心に参照しながら、彼がどのようにワタルさんとの関係性を築いたかを分析する。

2. 「すごいフラットに話せたな」

懇親会の約10日後にリョウタさんに実施したインタビューで、筆者は当日の感想を尋ねた。リョウタさんは「すごい楽しかった」と始め、ワタルさんとは今まで会った人とは「レベルが違うところで話が合う」と振り返る。それは彼がワタルさんと化粧やジェンダーについての「問題意識」(表2通し番号h、l、p、r)や「ふだん感じてること」(表2通し番号d、e、i、k、n、o、q)を共有できたためだ。

リョウタさんは他の同年代の男性と比べて、ワタルさんとは「すごいフラットに話せたな」と振り返る。

リョウタ：最近、結構男性の、同年代ぐらい

の男性の方と話すとき、(中略) たまにこう引っ掛かりながら話すこととかも、なんかあったりするんですけど、(中略) そういうのは全然感じずに、なんかこう、すごいフラットに話せたなって。

リョウタさんが同年代の男性と話すときに感じる「引っ掛かり」とは、彼が化粧していることについて「そっち行っちゃうんだ」と反応され、「目に見えない壁」ができることを指すという。これはIII.4. で見た、リョウタさんが「ホモソ」の友人に化粧を施したときの「一方的な感じ」という語りに通ずる。

リョウタさんの「フラット」という感触を支えた背景には、単に化粧という共通点があることだけでなく、彼らがジェンダー問題に関心を持ちながら化粧していることがあると考えられる。これを捉えるうえでは、藤田智子(2005)による、現代日本の青年期男性たちの身体像についての聞き取り調査が参考になる。

藤田の調査によれば、青年期男性たちは「男らしい身体」を目指して行う筋力トレーニングや運動、食品摂取などの身体加工行為について互いに情報を共有している。しかし彼らが身体加工行為やそれについてのコミュニケーションを一緒に楽しむ場の存在は確認できないため、藤田は、男性にとって「あくまでも友人は競争相手であるともいえる」(藤田 2005: 94) と考察する。

ジェンダー問題への関心を共有するリョウタさんとワタルさんにとって化粧実践は、藤田(2005)の事例のように「男らしい身体」を競って獲得する行為というより、「男らしい身体」を価値づけるジェンダー規範に疑義を呈するものである。IV.1. で述べたように、ワタルさんは化粧のジェンダー規範意識を解消したいという思いを強く持つ。リョウタさんもワタルさんの考えに関心を示し、この思いを抱いたきっかけを尋ねると、ワタルさんは次のように答えた(表2通し番号1)。

ワタルさんは昔から、女性が好むものが好きだったり、「かわいい」と言われたりすることが多

かったが、周囲の人びとの反応に「男の子なのにね」というニュアンスを感じるがあった。以前は「そういうものだ」と受け入れていたが、徐々に、「男の子なのに」と言われること自体がおかしいと思うようになった。

これを聞いたリョウタさんは、彼自身はワタルさんほど「男性のなかでマイノリティ」ではないものの、野球やサッカーといった「男子あるある」に詳しくないため、ワタルさんと同様に「グラデーショナル的には少しマイノリティ寄りなのかもしれない」と答えた。

リョウタさんはワタルさんとの間に「グラデーショナル」的な差異を認めつつ、「男性のなかでマイノリティ」という位置性に連帯意識を感じていることが読み取れる。実際に彼らは男性としてアイメイクがしづらいこと(表2通し番号h)や、化粧直しをする場所がないこと(表2通し番号q)等の化粧する男性に特有の困難について、「確かに！」と頷き共感し合う。

このような文脈のもと、リョウタさんはワタルさんを「競争相手」(藤田 2005)ではなく、連帯意識や共感を通した「フラット」な関係としてまなざすことが可能になる。リョウタさんにとってワタルさんとのつながりは、「優越志向」(伊藤 1993)をつくりあげるような「ホモソ」の振る舞いとは異なり、むしろそれを学び捨てる機会になっているといえよう。

3. 「マイノリティというわけでもない」

では、IV.2. でみたようなワタルさんとの関係性を、リョウタさんは「ホモソ」と比較してどのように捉えているのだろうか。筆者はリョウタさんに、懇親会でのワタルさんとのやり取りは彼のいう「ホモソ」に「近かったか、あるいは遠かったか」と尋ねた。

リョウタさんは、ワタルさんとのコミュニケーションを「ホモソ」からかなり「遠かった」と評価し、さらに「すごい居心地がよかったな」と続ける。彼はその理由を、化粧という共通の話題があったこと、筆者とワタルさんとの「仲良さそう

な雰囲気」から筆者へのハラスメントの懸念が低いと判断できたこと、さらにワタルさんが「よく笑って」話しやすい人だったことから説明する。

他方で、リョウタさんがこの語りをまとめる際に言及するのは、ワタルさんがジェンダーをはじめ社会的な面で「マイノリティというわけでもない」という点であった。

リョウタ：[ワタルさんは] ジェンダー的にマイノリティ、向こうの方が社会的にマイノリティというわけでもないから、こっちとしてもそんなにこう、気兼ねなくというか。

*：あー、うんうんうんうん。

リョウタ：まあ歳……ちょっとまあ年齢の差があったとしても、こっちの発言でもものすごくないかインパクトを与えるっていうわけでもないし、そうっすね。

この語りからは、IV.2. ではリョウタさんが自身とワタルさんとの間に「グラデーション」的な差異を感知していたものの、最終的には二人を「マイノリティというわけでもない」男性同士として位置付けていることがわかる。男性同士という認識は、年齢の差よりも優先される。リョウタさんはワタルさんよりも6歳年上であるが、ワタルさんがジェンダーの面で「マイノリティ」でない以上、「こっちの発言でもものすごくないかインパクトを与えるっていうわけでもない」と判断する。

ワタルさんを男性同士とみなしながら、リョウタさんは、筆者を「女性」として位置づける。懇親会で彼は「女性ってどうやって[化粧を]始めてるんですか？」(表2通し番号f)、「女性はメイクでどういうところを褒めるんですか？」(表2通し番号r)と度々筆者に尋ね、「女性」としての発話を求める。

このようなリョウタさんのジェンダーカテゴリーの認識は、彼の言葉遣いにも表れる。リョウタさんは会の中盤頃からワタルさんに対して敬語がくだけ、時折「タメ口」が混ざった。ただし筆者に対して「タメ口」になりかけたときは、途中で

敬語に戻っていた。初対面でないうえに年下だが「女性」の筆者には敬語を使い、初対面であるものの男性同士のワタルさんに「タメ口」を使う様子からは、リョウタさんがジェンダーカテゴリーの同質性を強く意識していることが窺える。他方でワタルさんは、リョウタさんに対して敬語を使い続けていた。ワタルさんの側は、リョウタさんとの年齢差や、初対面の相手であることを意識し続けていたといえよう。

IV.2. では、リョウタさんとワタルさんの化粧を通じた関係性が連帯意識や共感に基づく、「ホモソ」とは異なるつながりであった側面を明らかにした。しかしリョウタさんは度々「タメ口」を使う一方でワタルさんは敬語を貫くという構図からは、二者の関係性が完全に「フラット」なわけではなく、「優越志向」(伊藤 1993) やさらには「権力志向」(伊藤 1993) がつくりあげられ得る側面が見えてくる。これはリョウタさんが、ワタルさんとは男性同士であるという認識を優先させ、年齢差や初対面であること、さらには彼らの間の「グラデーション」的な差異を棄却することで引き起こされる。

男性同士であるという強い意識は、リョウタさんが「ホモソ」への愛着を保持し、そこでの振る舞いを保ち続けていることを表すだろう。その意味で、懇親会でのリョウタさんの振る舞いは、完全に「ホモソ」から「遠かった」とは言い切れない。このことは、次のIV.4. で確認するように、リョウタさんも部分的に認識するところであった。

4. 「笑っておしゃべり」できない

インタビューの終盤で筆者はリョウタさんに、ワタルさんとのコミュニケーションに「残るホモソ的な部分があったか」と質問した。リョウタさんは「ホモソ感」は「あんまりなかった」としながらも、「僕がこうだったらよかったのにな」と思うことがあると述べる。それは、自身の振る舞い方についてである。

リョウタさんは、懇親会に「ホモソ」とは異なる居心地の良さを覚えながらも、自分の価値観や

振る舞い方がこの場にふさわしいか確信しきれず、「普通に楽しそう」にすることが難しいと感じていたという。III. でみたように、リョウタさんはジェンダー問題への関心と共に化粧するようになった過程で、「優越志向」(伊藤 1993) をつくりあげるような「ホモソ」のコミュニケーションへの問題意識を深めた。しかし現在の彼は「ホモソ」の振る舞いを学び捨てる過渡期から「まだなかなか抜けられな」いため、「普通に楽しそう」に話すことが難しいと語る。そのようなリョウタさんが自身と対照的にまなざすのは、ワタルさんが筆者と「普通に楽しそうに」「笑っておしゃべり」していた様子である。

リョウタ：ワタルさんと*さんとがすげえ、なんか普通に楽しそうに話し、なんか、笑っておしゃべり、してるのを見て、なんか、なんか、羨ましかったというか(笑)。

*：アハハ(笑) そうなんですか。

リョウタ：羨ましいというか、そう、そういう風にできたらいいなって、結構常々思うんですよね。

リョウタさんは「笑っておしゃべり」するワタルさんが「羨ましかった」と笑いつつ、「そういう風にできたらいいな」と常々思うと語る。続けてリョウタさんは自身の振る舞いから「堅さみたいところが抜けな」いのに対し、ワタルさんを「柔和」と表現する。

このことは、ワタルさんの側にも認識されていた。筆者は後日ワタルさんに懇親会の感想を尋ねた。ワタルさんは、リョウタさんとは化粧や美容への関心を共有していたため、学校や会社の知人たちに比べれば親近感を覚えたものの、彼がふだんSNSやイベントで交流しているような「美容界限」の雰囲気とは少し違ったとする。ワタルさんによれば、「美容界限」の人たちには、人当たりがよく物腰の柔らかい印象があるという。ワタルさんはリョウタさんの振る舞いを、「美容界限」の物腰の柔らかさとはある程度異なるものとして捉え

ていた。

懇親会においてリョウタさんはワタルさんと、化粧実践がジェンダー規範に疑義を呈するものになるという意識を共有することで、「ホモソ」とはある程度異なる形でつながることができた。ただしワタルさんの感想からもわかるように、彼らのつながりは決して強固でも排他的でもなく、ゆるやかなものである。

ここからは、リョウタさんが化粧実践と共に「ホモソ」の内と外を行き来しながら生きていることが見えてくる。リョウタさんは「ホモソ」の外で、女性たちや同じく化粧する男性とつながりながらも、一見わからない化粧をしたり敢えて化粧を隠したりしながら、「ホモソ」に出入りし続けることができている。換言すれば、リョウタさんは化粧を習慣化しながらも、「ホモソ」から完全に離脱することなく生きていける状態にある。そのためリョウタさんには、「ホモソ」の内でも歓迎される振る舞いも残り続けている。だからこそリョウタさんは「ホモソ」の外でも、伊藤(1993)のいう「優越志向」や「権力志向」を行為遂行的につくりあげるような「ホモソ」の振る舞いを表出させてしまう。

ただしリョウタさんは上の語りの後、自身の振る舞いの堅さを克服していれば、ワタルさんと「もっと話せたかもしれない」と続けていた。彼はこのことを決してつながりの失敗としてはみなさず、「ホモソ」の振る舞いをさらに学び捨てる展望を見出している。

V. 結びにかえて

——男たちをつなげ直すものとしての化粧

化粧する男性として生きるリョウタさんの語りと実践から見えてきたのは、彼が化粧実践を通して他の男性とのつながり直しに開かれる様相である。V. ではリョウタさんのつながり直しの試みにおいて男性の化粧実践が持つ意味を考察し、リョウタさんにとって化粧実践はどのような意味を持

つのか、という本稿の問いに答えたい。

リョウタさんのつながり直しは、化粧が一時的な装飾行為であることと、男性の化粧実践がジェンダー規範に疑義を呈する実践になり得ることに支えられている。リョウタさんはジェンダー問題への関心と共に化粧を始めたことで、男性規範を強く内面化した男性コミュニティ「ホモソ」の外とのつながりに開かれる。

同時にリョウタさんは化粧を隠しながら「ホモソ」の内にも居続けられているために、化粧実践を通してこれまでと異なる形で「ホモソ」とつながり直そうとし始める。「ホモソ」で突然化粧していることを打ち明け、居合わせた友人に化粧を施す彼の実践は、「男が化粧するなんて」という「ホモソ」の規範意識を揺るがす。

さらにリョウタさんは同じく化粧する男性・ワタルさんとジェンダー問題への関心を共有し、共感や連帯意識を通してつながる。リョウタさんにとってこのつながりは、彼が「ホモソ」で身につけてきた振る舞いを学び捨てる機会になった。

ただしリョウタさんのつながり直しには限界もある。彼は「ホモソ」に愛着を保持しながら出入りし続けるゆえに、「ホモソ」の外でも「ホモソ」の振る舞いを表出してしまふ。そこで男性同士がまとめあげられ、「女性」が差異として有徴化される限り、リョウタさんのつながり直しがミソジニーとホモフォビアを基盤とする男性同士のホモソーシャルな関係 (Sedgwick 1985=2001) を生み出す可能性は決して否定できない。

しかしながら、リョウタさんの一連の実践は、彼が「ホモソ」の内と外とを行き来しているからこそ可能になっていることには重要な意味があると、筆者は考える。一見わからない化粧を「ホモソ」で突然見せて他者を化粧実践に巻き込んだり、「ホモソ」の外で「優越志向」(伊藤 1993) をつくりあげるコミュニケーションを学び捨てる機会に開かれたりするリョウタさんの試みは、「男は化粧しない」、「男は『優越志向』を持つ」という幻想を通した男性ジェンダーの反復行為を攪乱する、「ジェンダー・トラブル」(Butler 1990=2018)

の実践であるといえよう。

このようにリョウタさんの化粧実践はこれまでとは異なる形で他の男性たちとつながり直す機会を彼にもたらすものだといえ、これを本稿の問いへの答えとしたい。本稿の結果は、男性の化粧実践から、男性として生きるという現象を照らし出すものである。ただし本稿はあくまで男性の化粧実践の意味野に切り込む基礎作業であり、本稿の議論は男性の化粧実践のひとつの様相に過ぎない。今後は複合的な調査と分析を重ね、化粧しながら男性として生きるという現象を明らかにしていく。

謝辞

本調査にご協力を賜った御二方、棚橋訓先生、匿名査読者の御二方に心より御礼申し上げます。調査実施にあたっては、お茶の水女子大学ナガセ研究奨励金、JSPS 科研費 23KJ0959 の助成を受けた。

注

- 1 調査実施にあたっては、所属大学倫理審査委員会の承認を受けた(受付番号 2022-58、2023-53)。
- 2 リョウタさんの「ホモソ」という表現は、ホモソーシャル (homosocial) 概念と関連することが推測できる。しかし本稿では「ホモソ」を足早に学術的なホモソーシャル概念と同一視するのではなく、リョウタさんの語る「ホモソ」の意味に接近することで、彼の生活世界における化粧実践の意味を探りたい。なお日本の男性同士の関係性を扱う研究では、しばしばイヴ・コゾフスキー・セジウィック (Eve Kosofsky Sedgwick) のホモソーシャルの議論 (Sedgwick 1985=2001) が援用されるが、その妥当性は十分に検討されていない。すでに先行研究では、セジウィックの枠組みの限界が指摘されている (佐伯 2015; 星乃 2024)。

参考文献

- Butler, Judith. 1990. *Gender Trouble: Feminism and the Subversion of Identity*. Routledge. (竹村和子訳, 2018, 『新装版ジェンダー・トラブル——フェミニズムとアイデンティティの攪乱』青土社).
- 曹美庚, 2016, 「身体接触における文化の影響」『阪

- 南論集——社会科学編』(阪南大学学会)第51号(3): 263-274.
- 藤田智子, 2005, 「青年期における男性の身体像に関する考察」『ジェンダー研究』(お茶の水女子大学ジェンダー研究センター)第8号: 79-98.
- 平松隆円, 2009, 『化粧にみる日本文化——だれのためによそおうのか?』水曜社.
- 星乃治彦, 2024, 「明治末期における『男の絆』と軍隊——巖谷小波とドイツの性科学者たち」『アジア・ジェンダー文化学研究』(奈良女子大学アジア・ジェンダー文化学研究センター)第8号: 21-31.
- Iida, Yumiko. 2005. "Beyond the 'Feminization of Masculinity': Transforming Patriarchy with the 'Feminine' in Contemporary Japanese Youth Culture." *Inter-Asia Cultural Studies* 6(1): 56-74.
- 伊藤公雄, 1993, 『「男らしさ」のゆくえ——男性文化の文化社会学』新曜社.
- Jourard, Sidney Marshall. 1966. "An Exploratory Study of Body-Accessibility." *British Journal of Social and Clinical Psychology* 5(3): 221-231.
- 株式会社インテージ, 2023, 「ポストコロナでも成長を続ける男性化粧品市場——2022年は5年前の1.5倍、23年上半年も前年同期比15%増」, 株式会社インテージホームページ, (2024年10月26日取得, <https://www.intage.co.jp/news/1786/>).
- 川野佐江子・徳迫栞・沢辺祐馬・日比野英子, 2021, 「男性化粧品に対する現代人の意識とその社会的背景」『大阪樟蔭女子大学研究紀要』(大阪樟蔭女子大学学術研究会)第11巻: 23-34.
- Miller, Laura. 2006. *Beauty Up: Exploring Contemporary Japanese Body Aesthetics*. University of California Press.
- 西岡敦子, 2013, 「男性の化粧は受け入れられるのか——男性の化粧行動から」『繊維製品消費科学』(日本繊維製品消費科学会)第54号(4): 332-338.
- 小口藍子, 2024, 「パフォーマンス・ヴィジュアルを援用する男性／男性性研究の考察——理論から展望へ」『Gender and Sexuality』(国際基督教大学ジェンダー研究センター)第19号: 1-22.
- 佐伯順子, 2015, 『男の絆の比較文化史——桜と少年』岩波書店.
- 桜井厚, 2002, 『インタビューの社会学——ライフストーリーの聞き方』せりか書房.
- Sedgwick, Eve Kosofsky. 1985. *Between Men: English Literature and Male Homosocial Desire*. Columbia University Press. (上原早苗・亀澤美由紀訳, 2001, 『男同志の絆——イギリス文学とホモソーシャルな欲望』名古屋大学出版会).
- 竹原卓真・奥野波留香・柴入陽, 2021, 「男性の魅力におけるメイクの効果」『日本顔学会誌』(日本顔学会)第21号(2): 61-70.
- 山越英嗣, 2022, 「関係性としてのタトゥー——千葉市でヒップホップファッション・ストアを営む若者たち」山本芳美・桑原牧子・津村文彦編著『身体を彫る、世界を印す——イレズミ・タトゥーの人類学』春風社.
- 山本梨華子, 2018, 「化粧から見る男性の美意識の変化」『早稲田社会科学総合研究』(早稲田大学社会科学学会)別冊2017年度学生論文集: 155-170.

掲載決定日: 2025年5月13日

Abstract

What It Means for a Man to Wear Makeup: A Basic Consideration Through One Man's Narrative and Practice

Aiko Oguchi*

In contemporary Japan, the practice of men wearing makeup has been expanding and gaining popularity. Past frameworks on men and masculinities tend to assume ideologies and structures in advance, lacking in the examination of the specific practices of each individual to try to live as a man. Through interviews and participant observation of a man who routinely wears makeup, this article investigates what it means for him to wear makeup and explores his practices of trying to live as a man. Since starting to use makeup along with an interest in gender issues he has felt uncomfortable with groups of men with whom he used to fit in. He recognizes they internalize gender norms against his makeup practice. He also finds it problematic that they underestimate caring communication and care practice including makeup. However, with makeup practice, opportunities have opened up to him to experience new ways of connecting with other men, such as putting makeup on his male friends and interacting with another man who also wears makeup. It is indicated that makeup practice enables him to reconnect with other men in a way that is different from that in which he previously connected with them.

Keywords: contemporary Japan, men, makeup, interview, connectedness

* Graduate School of Humanities and Sciences, Ochanomizu University

